

さんぽ木だより

—— 友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌 ——

vol. 38
2021 秋号



すずき出版発行「心のうたかれんだあ」(平成3年版)より 詩／坂村真民「花無心」 画／海野阿育

坂村家のアルバム

vol.8

父親を失った少年

少年

1 六十八年前の九月十五日

少年は父のお骨を

膝の上に置いていた

熊本は藤崎八幡宮の大祭で

軽便鉄道はしばしば立ち往生した

ぼしたぼしたの祭り囃子のなかで

大事な父を失った一家が

ひっそりと乗っていた

2

少年はすっかり変わり

生きてゆくことを

考えるようになった

生きるということが

どんなものであるかを

一つ一つ知っていた

〈3・4・5省略〉

6

父を失った年

すぐ近くの村に

女の子が生まれた

その子があとで

少年の道づれとなってくれた



父・子司(たねじ)の
生家があった地
現在の写真



村の共同井戸
現在の写真

昂(真民の戸籍名)が、小学校3年の秋、生活が一転する出来事が起こりました。紹介する詩は、その秋から68年後、父親(子司)の命日である9月15日に詠まれたものです。2枚の写真は、坂村の本家と村にある共同井戸の現在の様子を写しています。広い本家跡地は草が刈られ手が入っているようでしたし、井戸は住民によって清掃され澄んだ水面がみられました。

この詩の1節は、熊本市藤崎八幡宮の秋の大祭・ぼした祭りで賑わうなか、群衆でしばしば立ち往生する軽便鉄道に乗る一家の様子が書かれています。この一家の周りだけ音が消えたような世界で、長男と思われる少年の膝の上には白布に包まれた骨壺らしきものが置かれていて、胸が痛むワンシーンです。―この時を境にして、少年は変わって行きました―

昂が父親と一緒に食事をした記憶の最後は、8月の大かみなりの日とありますから、急に発病し、あつという間に悪くなったことがわかります。地方の医者ではどうにもならず熊本県立病院に入院し、長男の昂と妹の二人だけが家に残っていました。電報がきて二人は汽車に乗り、軽便鉄道に乗り病院に向かいます。父親に会えるものと、道中楽しく珍しく行つた先に待っていたのは、冷たい部屋に蠅のような顔になって寝ていた父親でした。

5人の子を残して父親が急逝し、母と子供達はどうなったのでしょうか。その時、母親(夕子)は36歳の若さでした。後年、父・真民が自分の母を語るとき、外せない光景が有ります。夕子さんの実家から、おばあさん(夕子の母)がやって来て「上の3人は、養子にやるか奉公に出すかして、下の2人だけ連れて帰って来なさい」と説得し続けますが、時計の針が深夜零時を回ってもお母さんは首を振りません。部屋の片隅で息を潜めて様子を見ていた

表紙の詩



花無心(48歳)
 濁りなき身に
 濁りなきものの寄り来る
 濁りなき心に
 濁りなきものの映り来る
 濁りなきものを恋い
 路傍の花に向かう
 花無心にして

蝶来り
 蝶無心にして
 花開くとや
 噫々

この詩は、真民が48歳の時の詩です。花は、きれいに咲こうとか、美しく見せようとか考えずに、ただ咲くことだけに、いのちをかけて一途に咲くのです。真民は、そういう花が無心に咲くように、「濁りなき心」を持って生きてゆきたい、という願いを込めてこの詩を作ったのだと思います。

この詩の後半の、「花無心にして 蝶来り 蝶無心にして 花開くとや」のところは、良寛さんの漢詩の一部を引用しています。

この詩は、真民の好きな良寛さんの言葉を借りて、「無心」になることの大切さ、「濁りなき心」を持つことの尊さを詠った詩なのです。

少年。その時の異様な雰囲気は、真民の心に生涯残っていたと言います。おばあさんは、諦めて帰って行き、5人の子供達は、母親の暖かい羽の中で暮らし続けることになりました。しかし、これはその後のお母さんの大きな苦勞の始まりでもありました。

母子は、父親の生家・坂村本家に寄食します。八嘉村中坂門田という名が示すように坂の多い村でした。生来腺病質で胃腸の弱い昂は、一時おじさんの家に預けられていたと聞きます。翌年、一家は八嘉村田崎に移り住みますが、小さな藁屋根の、雨が少し激しく降ると6人が寝る処もないほど雨漏りのする暗い家でした。この田崎が、愛媛県砥部町を終焉の地とするまで、真民の本籍地となります。

当時の田崎は、「田崎きや 谷底 桶の底うりやなすびの 花が咲く」という歌がある

ぐらい貧しい村でした。お母さんと昂は、荒れた畑を借りて耕し、芋や蕎麦を作り始めます。現金収入を得るため、縄を編み、草履を作り、少しでも金目の多い石灰俵も編んだという詩が残っていて、こう続くのです。

―正月二日はどこの家からも トントントントントントントン わらうちの音がひびいてくる わたしも負けずに早く起きて トントントントン わらうちでわらをうち なわをない 草履をつくり 仕事始めをすませて雑煮を食べた―

田崎村の貧しさもさることながら、それ以上はまだ小さい子供まで手伝う坂村家の貧しさが伝わってきます。

母親は、死に目に会えなかった我が子に、父親の「のどぼとけ」を仏さまとして床に置き、毎日お水をあげるよう言いつけました。それから

ら、毎朝暗いうちに起き、村の共同井戸に水を汲みに行き、父の「のどぼとけ」に明かりをともし礼拝する日々となりました。これが、真民の早起きの原点です。小学校も谷間にある小さい複式の学校に変わりました。学校は面白くなく友もなく、次第に内気な孤独な少年となつてゆきました。

さて、ここで紹介した詩の最後の節を読んでもみましょう。もうお分かりですね。女の子とは、私の母・辛島久代です。菊池川を隔てて橋を渡った先の村に生まれました。父・真民の妻に相応しい人は世界中でただ一人、母・久代しかいないと私は思っています。

やりきれなくせつない、この悲しい詩は、その先に淡い光を見せて終わります。出会いは18年後…。

文／西澤真美子

めぐりあいのふしぎに有難う

梶川 満智子 (78歳)

真民先生の長女、梨恵子先生が久万町直瀬中学校で教員をされていた時に、教員住宅が一緒だった。また、梨恵子さんの長女、真理さんが直瀬小学校2年生の時に担任だった。そういう関係から、真民詩に出会い、愛読するようになった。



◆朴庵で坂村真民先生と対面

第一日曜日十時私は、朴庵例会に出席する。季節に合った朴庵のしつらえの前に座わる先生。稲荷さんの和やかな開始の言葉、その横にはいつも青芳先生が居た。みんなに囲まれた中で真民先生の言葉が紡ぎ出される。そのしぐさを含めた雰囲気そのものを皆さんも第一日曜日の楽しみとしていたと思います。

◆私と真民先生を出会わせてくれた三人

一人目は、真民先生の長女梨恵子先生とお孫さんの真理さんとの教員住宅での出会いがあり、梨恵子先生が松山へ転任される時に、「これ、私の父の本です。」と美しい本を頂いたのです。真理さんからは、「私のおじいちゃんはお習字の先生なの。」と教えられました。全く、真民先生は書家そのものでした。

二人目は、従兄弟の岡徳廣さんの言葉でした。「開花亭の朴庵へ第一日曜日に行けば、真民先生の話が聞けるよ。行ってみたら。」と誘ってくれたのです。

それから私は、日曜美術館を見終えて朴庵への第一日曜日になりました。偶然真民先生も同じで田中一村さん

の日もその話をされ、うれしく領きながら聞きました。

朴庵での例会が多人数となり裏の大部屋に青芳先生皆さんも移りモニターでの先生との対面に少し淋しかったのも思い出の一つです。

三人目は、片山克氏です。世話係だった片山さんから『詩国』その他の情報を送って頂き、退職後だった私は、山口イエローハットや奄美あやまる岬の詩碑建立の旅や、詩国五百号記念祝賀会等たくさんの方々に囲まれる真民先生のお幸せな姿を拝見できました。

坂村真民記念館が再び真民先生と会える場所となり、日曜日の講座を楽しむにしている現在。めぐり合いのふしぎに感謝です。

◆私の心に残る詩

一つの詩を選ぶとすれば、『光の種子』です。何度も先生から聞いたお母様の話「母恩」の詩だからです。

もう一つ、先生のお話をされる姿から選んだのが『年頭詩』で、私が拝見した真民先生の生きる姿そのものだと感じます。「声に出して読もう」これが私の真民詩のお勧めです。

『光の種子』

母の名を種子といった
だからわたしは

花の種

果物の種

どんな種でも

てのひらにのせ母を思い

その苦闘の生涯をしのぶ

そして近頃特にああ母は

光の種子のような人であったと

しきりに思うようになった

「念ずれば花ひらく」八字十音の

真言を授けて下さった母よ

それは生命の光のように

わたしを生かし

わたしを育ててゆく

『年頭詩』

ふりまわされるな

ふりまわされるな

なにもものにも

ふりまわされるな

これは真理を求め

真実に生きる人間の

大きなちかい

大きなおきて

詩を作る者の

大きなほこり

北濱普門さんと坂村真民



北濱普門さんは、明治40年京都に生まれ、寺院の壁画作成助手や美術学校で洋画を学び、戦後は山田無文老師に師事します。

昭和32年に出家得度し、妻を連れて一草庵の庵守となるため松山へ来ます。昭和34年5月に一草庵を出て、京都山科に家を借り、版画制作に専念し、昭和40年4月より奈良市秋篠

町に居を構え、版画制作と仏画教室を業として、妻と二人で慎ましく過ごしていました。

親交があった人たちは「平成の良寛さん」として慕われ、関西の仏教界では、東大寺長老、山田無文老師が中心となって、仏画を販売する会を設立したり、ヨーロッパへの写生旅行の資金援助を呼び掛けるなど、

支援者にも恵まれ平穏な生活をしていました。

しかし、昭和60年に脳梗塞を患い、さらに自宅と版画の版木等を

知人にだまし取られ、愛媛県伊方町の知人が援助を申し出て、妻と二人で愛媛に移

ることにりましたが、そこでも人に騙され全財産を取られ、失意の中で療養生活を送るも、妻が亡くなり、晩年は不運が重なり、平成4年に松山の病院で亡くなりました。

坂村真民とは、一草庵に来て以来、大山澄太さんを通して親しくなり、亡くなるまで手紙の交流が続きました。

真民は、昭和33年7月の「真民ノート」の中で、吉田の家に托鉢に来た時の普門さんのことを「普門さんの目は美しかった。今までいろんな人に接したが、この人の目は童眼だなあと思った。珍しく会ったあとの感じがよかった。」

また昭和37年9月の「タンポポ堂日記」には、「人は何と言われるかも知れぬが、私は普門さんが好きだ。創作家の魂を持っている限り、私はこの人と親しくしてゆくことができよう。」

今回の展示は、真民が普門さんから頂いた仏画、はがき等に合わせ、長年普門さんと交流のあった柴田キミコさんが所有していた仏画、手紙、はがき等を展示しています。

柴田（清家）キミコさんは、普門さんが一草庵の庵守をしていた時に知り合い、その後家族ぐるみの交流を続けて、普門さんから数百点の仏画、手紙、はがきを貰い、それを大切に保管していたのを、終活のため記念館にすべて寄贈してくださいました。



真民さんの詩を 版画かれんだあにする

開館9周年記念特別展「海野阿育と坂村真民の世界」(2月20日～8月29日)の記念講演会が、コロナ禍による2度の延期を経て、6月19日(土)、砥部町商工会館で開催された。「心のうたかれんだあ」制作への経緯や、そこに込められた思いに、およそ60人の参加者が熱心に耳を傾けた。



講演の際にタンポポを持参したという真民さんにあやかり、海野さんは自作のタンポポ版画を胸に着けて登壇。

学生時代から幼稚園や保育園で造形活動を指導していたという海野さんは、子どもたちとの思い出を楽しそうに語ったのち、発売から33年たって現在も毎年発行されている「心のうたかれんだあ」の誕生について語った。

版画で年賀状を作っていた海野さんは、園長先生からの依頼で、「法句経」の文言を版画にした「ダンマパダカレンダー」を制作。カレンダーは大変好評で、手刷りが難しくなったため、幼児向けの教材を扱っていた鈴木出版から発行されることとなった。しばらくして、同社から「真民さんの詩で詩画集を作りませんか」と提案があり、それが真民詩との出会いとなったそうだ。

詩集から選んだ詩に絵を添えた詩画集は、昭和59年の『自分の花を咲かせよう』を最初に、『花一輪の宇宙』(平成元年)、『あうんの花』(同3年)と、3冊が刊行された。

砥部のタンポポ堂で75歳の真民さんと41歳の海野さんが対面したのは、第一詩画集が出た昭和59年のこと。

「お会いして、この方の詩なんだと、

ほっとした」「詩の裏に真民さんが張り付いて見えるようで安心したんです」と、初印象について語った。

昭和63年、真民詩と海野さんの版画のコラボによる「心のうたかれんだあ」が誕生した。「心のうたそのものの真民詩と僕の版画が発酵して生まれたとても大事な作品」には、あえて平仮名にしたタイトルがよく似合う。

詩の選定にも頭を悩ませるが、版画にすると、詩の一部を省略しなければならぬこともある。

「作品の一部を削ることは詩人にとって『冒涇』ではないかと。でも、真民さんは許してくれた」「しかし、そのことは、どれだけ僕が真民詩を読めたかという、そこは『勝負』なんです」

「私が短くした部分と下の原文を比べて、『海野はどう読んだのか』『ここが大事なので、自分ならこう切り詰める』と、そういう読み方を楽しんで下さい」と聴衆に語りかけた。

今年のカレンダーに使われた詩「一本の道を」についても触れた。この詩は、同じ詩でありながら、出典が異なると、漢字から平仮名、あるいは平仮名から漢字へと表記を変えたり、一部を削るなど、手が加えられている。

疑問に感じていたが、西澤館長から、真民さんは万葉集も研究していたという話を聞き、一字一句もおろそかにしない、言葉への深い思い入れを改めて感じたそうだ。

真民詩と真剣に向き合ってきた海野さんは、詩「空白の詩集」などに込められた反戦への強い願いを敏感に読みとった。そうした真民さんの思いを可能な限り形にしたいと、毎年7、8月のテーマは「敗戦」と決めている。

また、制作で心がけるのは、災害や歴史的な事象も含め、「ゆく年が何であったか」そして「くる年に何を望むか」だという。一年を振り返り、迎える年への希望を込めて、仕事机に向かう。

最後に、海野さんが大好きだという次の詩を全員で朗読し、1時間あまりの講演を締めくくった。

会いたき人あれば

会いたき人あれば

一輪の花にも

こころときめき

一羽の鳥にも

むねをあつくす

坂村真民記念館を応援しています



ホテルクリオコート博多

〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街5-3 Tel 092-472-1111

経営理念

最大の会社より最良の会社
人さまに喜んで頂く仕事と
自分づくりをする



株式会社 宣翔物産

〒812-0857 福岡市博多区西月隈3-6-17 Tel 092-475-1151



『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曾木材産業株式会社

〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫

TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 <http://www.nagiso.co.jp> メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院



介護付有料老人ホーム トゥービー

介護付有料老人ホーム
To-be

全78居室/20㎡~24㎡(1F&2F)



住宅型有料老人ホーム モンレーヴ砥部

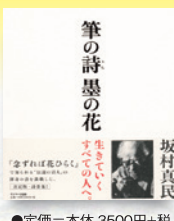
住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部

全18居室/40㎡~90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院西隣) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

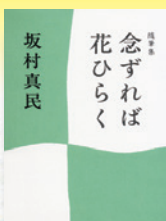
詩墨集
筆の詩墨の花



●定価=本体 3500円+税

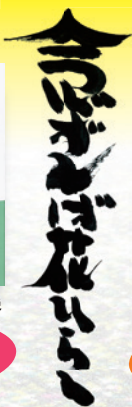
坂村真民記念館
所蔵の作品を満載!

随筆集
念ずれば花ひらく



●定価=本体 1800円+税

初めての
随筆集を復刻!



10万部突破の
超ロングセラー!

詩集
念ずれば花ひらく



詩集●定価=本体各1000円+税

サンマーク出版

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
<http://www.sunmark.co.jp>

いま届けたい、生き方の道しるべ



詩集 二度とない人生だから

致知出版社 坂村真民シリーズ



全424頁、
豪華
座右版

生涯1万篇以上といわれる
膨大な詩作の中から366の名詩を精選。
長年、真民詩に魅せられ人生を歩む道標としてきた
『致知』編集長が渾身の思いで編纂に当たりました。
心が弱った時、悲しみに直面した時、
ぜひ本書を紐解いていただき、
心の糧となる詩に出逢っていただければと願っています。

坂村真民 一日一詩

坂村真民＝著／藤尾秀昭＝編
定価＝本体2,000円＋税
四六判上製

人生で口ずさみたくなる
言葉が見つかる



坂村真民 一日一言
坂村真民＝著
定価＝本体1,143円＋税
新書判

円覚寺派管長が選んだ
真民詩100選



坂村真民詩集百選
坂村真民＝著／横田南嶺＝選
定価＝本体1,300円＋税
新書判

真民氏が自らを励まし、
勇気づけるために綴った87篇の詩



坂村真民箴言詩集 天を仰いで
坂村真民＝著／西澤孝一＝編
定価＝本体1,300円＋税
四六判並製

月刊『致知』に掲載された
幻のインタビュー集



詩人の颯声を聴く
坂村真民＝著／藤尾秀昭＝聞き手
定価＝本体1,300円＋税
B6変型判上製

ち ち しゅ ばん しや
致知出版社

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-24-9
TEL.03-3796-2118 FAX.03-3796-2109

オンラインショップでも
ご購入できます！

致知オンライン で 検索

坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の
会は、会員の皆様と記念
館との交流を図り、記念館
を共に支え、育てていくこと
を目的とした会です。入会
された方には会報と、真民
グッズなどの記念品を贈呈
します。

パスポート会員 年会費2000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人、 観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧ください 坂村真民記念館 友の会

検索

〈編集後記〉

オリンピック・パラリンピックの開催を目前に控えて、この一文を綴っています。日々変転する不安定な現状に、私達はそれぞれの立場で、色んな事を考えたのではないのでしょうか。しっかり見る目考える力言う勇氣、流されないようにと願いつつ、反省ばかりです。(真美子)

タンポポだより vol.38 秋号

令和3年9月1日発行

発行元／坂村真民記念館友の会事務局

〒791-2132 伊予郡砥部町大南705 坂村真民記念館内

TEL089-969-3643 FAX089-969-3644

〔坂村真民記念館〕

開館時間／9～17時(入館は16時30分まで)

休館日／月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、12月29日～1月1日

入館料／65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、

小・中学生200円 ※15人以上の団体は割引あり